

縄文語と弥生語

小山雅人

1. 北方系縄文語—古アジア系

日本語の起源をめぐる論争は、ここ十数年かなり低調であったが、三内丸山遺跡にはじまる昨今の縄文ブームのなかで、当時の衣食住から精神世界まで論議されており、縄文人の言葉というテーマも見られるようになった。以下の各節の冒頭に、民族学者佐々木高明^(注1)氏の生態学的方法で展開された文化系統論から言語に関する部分だけを拾って引用し、時代順に日本語系統論の諸説を展望してみたい。

「第1の画期:縄文文化は東北アジアの落葉広葉樹林帯(ナラ林帯)の文化と共通している。従って、縄文時代の言語の中核をなすものは、現在の古アジア語の祖形に近いような①「原・北東アジア語」とでもいうべきものだったのではないか」

考古学からも日本列島の旧石器・縄文文化の北方的性格が主張されている。^(注2)数万年前の東北アジアでは、古アジア諸語(第1図の極北アジア諸語)が、シベリアへ進出した最初のモンゴロイドの言語として行われていたと想像できるだけである。この古アジア諸語は、一語族ではなく、非アルタイ語族のシベリアの諸語をみつめただけのものであるが、抱合語であることなど、おぼろげに共通する文法的要素もあり、^(注3)アイヌ語にも、チュクチ語など古アジア諸語と一部共通点がある。一方、^(注4)形質人類学からは縄文人とアイヌ人との近似、^(注5)民族学からは縄文・アイヌ・古アジア系の文化の共通点^(注6)が指摘されている。言語学的証明の術はないが、縄文時代以後の最初の日本語は、佐々木氏のようにアイヌ系ないし古アジア系の言語と想定しておこう。ただし、日本語の中の古アジア語的痕跡というのは、全く不明である。

A・スラヴィク氏は、縄文時代には「類アイヌ語」(X語)が日本列島で話されていたとする。弥生時代以降、X語はアルタイ語やオーストロネシア(マライ・ポリネシア)語の成素が加わって日本語となり、奈良・平安時代まで、南九州のオーストロネシア系隼人語や、関東～東北のX語の直系エミシ(蝦夷)語と併存し、その後エミシ語から、もしくはX語から分派したアイヌ語が北海道・サハリンに広がったという。^(注7)

また、日本語はもともと日本列島の言語で、その後いかなる言語にも取って替わられな

かったとする説も強くなってきた。服部四郎の「原日本語邪馬台国語説」、松本克己氏の「環太平洋言語圏説」、小泉 保氏の「縄文語説」がそれである。日本語の系統をめぐる1世紀半以上の論争で、いまだ決着がつかないのは、現存語族・言語のどれとも無関係に近いからで、人に例えれば、血縁関係があっても、何百年も経ていけば赤の他人と同じだという訳である。「系統が証明できないから孤立語」という消極的な通説が居直ったような積極的な日本語孤立語説である。比較言語学や言語年代学では、6千年前以前のことは手が届かず、旧石器時代はおろか、縄文時代早期以前が射程外なのは確かである。しかし、日本語は孤立語と言えるほど特異な文法の言語ではない。第1表の南島祖語以外は日本語と同じ文法体系をもっている。

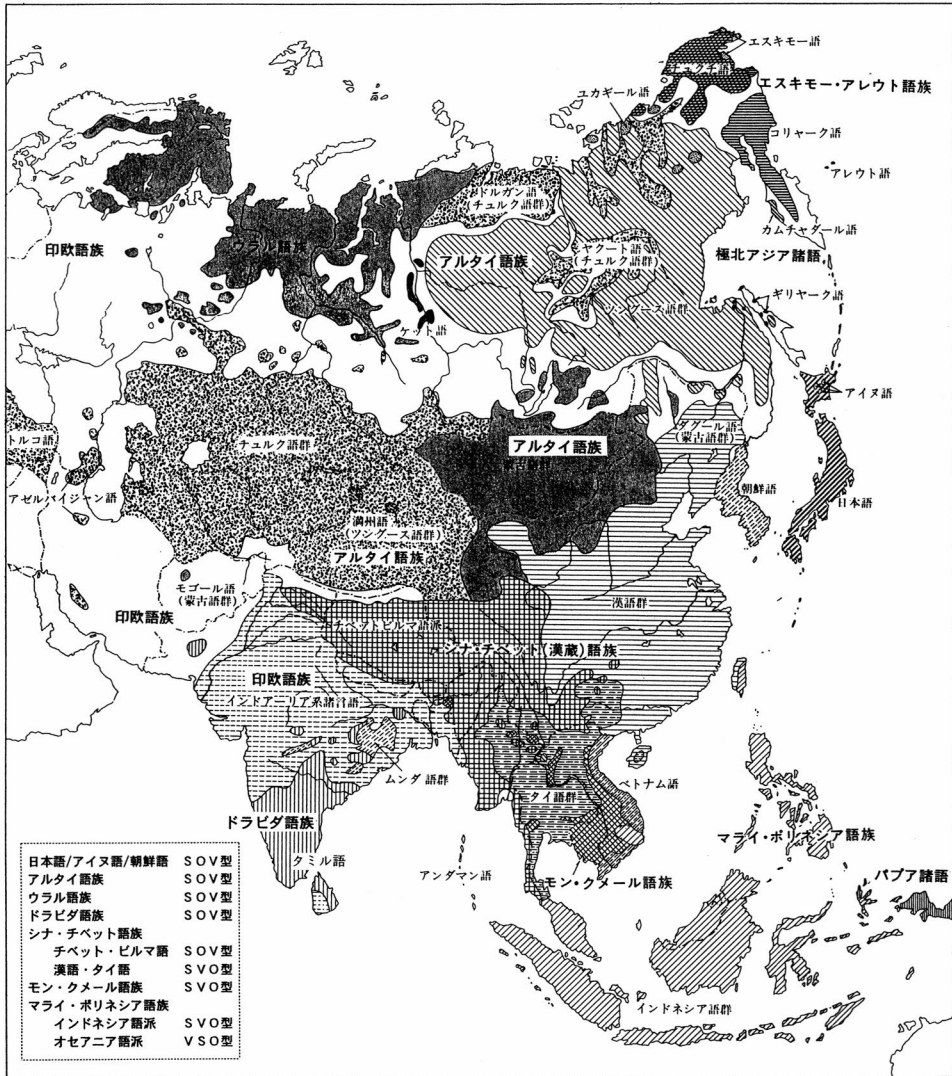
語彙についても日本語は決して孤立的でない。第1・2表は、基礎語彙100語について諸説から、対応語を提唱されているままだに^(補注)対照させたものである。対応関係の当否は別にして、決して少なくない語彙がこれらの言語で共通していることがわかる。なお、100項目のうち16の項目については対応語が提出されていない。そこで、これらを空欄にすることなく、基礎200語の中から適当に選んで埋めた。86と87の間の valley の項目は例外で、興味深いので特別に加えた。表中の日本語は旧かなづかいのひらがなで表記したが、少なくとも「は行」だけは「ば行」で読んでいただきたい。奈良時代以前は、「花」は「ばな」、「掘る」は「ぼる」であった。

2. 南方系縄文語—オーストロネシア系

「第2の画期：縄文時代前期、気候の温暖化に伴い、採集段階の照葉樹林文化が進出してくる。縄文時代の後・晩期には焼畑段階の典型的な照葉樹林文化が西日本に展開した。南方的な言語——具体的には②オーストロネシア系(南島語族；第1図のマライ・ポリネシア語族)の言語や③チベット・ビルマ系の言語が可能性として考えられる——が伝来し、列島の一部で北方的な基層語と言語混合の現象を起こした」。

最近の縄文ブームでもっぱら紹介されているのは、崎山 理氏の「ツングース語基層・オーストロネシア語混合語説」^(注11)である。民族考古学の小山修三氏も川本崇雄氏の「シベリア系言語基層・オーストロネシア語混合語説」を引いて、縄文文化の変容とよく一致しているとし、特に紀元前4000年頃(縄文時代前期)以後の大きな変革(集落の大型化と増加、大規模な墓地と祭祀場など)の背景にヒョウタン、リョクトウ、アサ、イモ類などの南方系栽培植物があり、「改革の原動力となった知識や技術をもった人々がこのとき渡来し、彼らの言語がそれまでのシベリア系の言語を大きく変えた可能性はつよい」と述べている^(注12)。

崎山説に先立ち、村山七郎は日本語の語源を南島語に求める研究を進めた。例えば、「う



第1図 アジアの言語地図 (注26②文献、233頁を改変)

お(魚)」は日本語の中で「ウラ」「イラ」ないし「イウォ」に溯るが、これは南島祖語の「イヴァク(復原形)」から来ており、ジャワ語の「イワツ」に対応する。また、「ほのほの」「あけほの」の「ホノ」は、「ポノ」を経て「バナ」に溯り、南島祖語の「バニ(復原形)」(夜)と比較でき、フィジー語の「ボギ」、イースター島語の「ポ」、ハワイ語やトンガ語の「ポオ」に対応する。さらに「あけほの(曙)」は、「アケ|ン|ポノ」(明ケ|ノ|夜)であり、南島(=オーストロネシア)語の語順で「夜明け」を意味し、日本語に化石的に残った南島語の痕跡であるという。このような手法で村山は、約200語の語源の証明(第1・2表参照)を行い、日本語彙の多くが南島語起源であるとした。^(注13)しかし、この方法については、李基文

氏が痛烈に批判している。「彼〔村山〕はしばしば南島祖語形から出発して古代日本語の語形に到達しているのである。そして、南島祖語形と古代日本語形の間のギャップを埋めるために必要な場合はいつも前鼻音化、重複、音位転換等を仮想することを(注14)はばからない」。日本語の「みどり(緑)」が「ミヂャウリ」(復元した原始日本語形)に溯り、語頭のm-は接頭辞、「リ」はアルタイ系語尾で、それらを外した「イヂャウ」が原始インドネシア語の推定形「ヒヂャウ」から来ており、タガログ語の「ヒラオ」、マライ語の「イヂャウ」(ともに「緑」の意)に対応するとい(注15)うような証明を読むと、村山の「比較言語学的魔術」に酔いつつも、李基文氏の批判にも賛同したくなる。

日本語系統論の本命アルタイ語には文法が近似する割に対応語が少ない(第1・2表参照)ので、日本語と全く構造が異なるが多くの語に対応すると思われる南島語との混合が提唱されたが、考え方が二つある。村山は、縄文時代の南島語系日本語が、弥生時代に到来した支配者的なアルタイ語の文法によって組み替えられたとい(注16)う考え方をした。川本説や崎山説では、先住のツングース語などの文法的枠組みに新来の南島語の単語を取り込んだもので、「てにをは」と動詞語尾だけを残した現代のカタカナ日本語のようなものと見てい(注17)る。

3. 日本語タミル語同系説

前節の冒頭で引いた佐々木氏の見解の中で、③のチベット・ビルマ系言語の到来を縄文時代に想定する説は、言語学からは出ていないようである。もし、焼畑を伴う照葉樹林文化の言語であれば、むしろタイ系言語の方が相応しいであろうが、ここで20年前に世間を騒がせたタミル語説に触れておこう。

大野 晋氏のタミル語説は、当初(1980年)、縄文時代中期か後期に焼畑農耕を伴う照葉樹林文化の雑穀栽培民が原タミル語をもたらししたとい(注18)う説であった。その後、水田農耕技術・機織り・金属器等の文化をもって、朝鮮半島と日本列島に同時に海から到来したとい(注19)うように見解が変わった(1990年代)。タミル語説は、どの時代に位置付けても、民族学からも考古学からも援護射撃を期待できない説である。筆者が敢えて採り上げたのは、言語として日本語とタミル語が極めて似ていることを否定できず、民俗的行事において儀礼のみならず言葉も一致している以上、他人の空似として捨て去ることができないからである。

大野氏は、祖語形の復元をしないので、比較言語学的魔術も行わない。比較の対象は、7～8世紀の万葉集の日本語と、前1世紀～後3世紀のサンガム文学の古典タミル語の単語の語幹の部分である。対応語は500語に及ぶ(第1・2表はそのごく一部)。また、比較は文法にも及び、多くの助詞や助動詞が比較され、音韻対応や用法の一致の証明がなされてい(注22)る。

奈良 毅氏は「アーリア族がインドにはいるまでは、ヒマラヤ山麓の平野部やパンジャブ地方の東部からアッサム地方一帯にかけては、オーストロ(アジア)系、ドラヴィダ系、シナ・チベット系の三言語集団が共存していたものと思われる^(注23)」と書いている。ドラヴィダ語族南部語派(原タミル語)の話し手は、確かに照葉樹林帯にいたのである。とすれば、渡来経路の大野氏の最初の見解も捨て難くなる。

4. 弥生語と「高句麗語」説

「第3の画期：稲作文化が日本列島に到来した時期、朝鮮半島を経由したヒトと文化の流れに伴って④現在の満州・ツングース語にちかいアルタイ系の言語が、長江下流域や江南地方からはおそらく⑤呉・越系(南方的な言語、正確な系統は不明)の言語が、南の島々を経由しては⑥オーストロネシア系の言語が、日本列島に伝来し、混合語としての日本語の根幹が形成された」

この時期に日本列島の言語が交替したと見る説は多い。特に西日本の人口が弥生時代の開始とともに急増したこと、形質人類学的にも大きな変化があったと見られることなど、水田稲作の開始に関する学際的な研究の進展にも裏付けられている^(注24)。⑤の呉・越系について言えば、彝緬(ロコ・ビルマ)系、タイ系、苗瑶(ミャオ・ヤオ)系など現在では雲南や四川に住む民族が、前1千年紀には江南(呉・越)から広東(百粵)のあたりにいたらしく、また楚語はもともと彝族の言語につながるとする説もあるという。具体的な日本語の系統論として、西田龍雄氏の「チベット・ビルマ語説」^(注26)や安本美典氏の「江南系ビルマ語説」^(注27)があるが、後者は方法的に問題にならず、前者については村山七郎の厳しい批判がある^(注28)。日本文化の源流として民族学者が注目するほどには、雲南を中心とする少数民族の諸言語は、日本語に似ていない。

弥生文化の道として考古学ではほぼ定説化しているのは④の半島経由のルートである。さすがに最近では朝鮮語(韓国語)そのものが2千年前に渡来したなどとする説はなくなったが、ここにひとつの極めて魅惑的な説がある。李基文氏の高句麗語説^(注29)である。大正時代の新村出の研究を引き継ぐもので、『三国史記』地理志の本高句麗地名を主な資料として、80ほどの単語が復元されているに過ぎない。ところが、この偶然かつ断片的に残った80語の内、「30例近くが中世韓国語と、またこれに少しも劣らぬほどの例が日本語と、そしてその半分ほどの例においてトゥングース諸語と、顕著な一致を示す」のである。対応する日本語の例として、第1・2表の基礎100語中には7語ある(ツングース語の欄)が、他にナマリ(鉛)、ウサギ(兎)、ナミ(波)、クマ(熊)、ナナ(七)、トラ(十)、イル(入)等々がある。どの言語とも対応しないとされる日本語の数詞が、この断片的な語彙の中で4例もあることは、驚

第1表 基礎語彙対応語一覧(1)

基礎語彙	南島祖語との比較	タミル語との比較	朝鮮語との比較	アルタイ諸語との比較	
				ツングース語	モンゴル・チュルク語
1 I	あ a : a(我)	な : nān(私)	나 : na(吾)	б : < *ba(我?)	
4 this	こ kō : *kau(我)				
5 that		あれ : a-tu(我)			
7 what	なに n ani : *anu(何) あに ani : *anu(何)	いづれ : e-tu(どの)			
9 all		もう : muŋ-u(もう)	모르 : ml(皆)		
10 many	おほい < *əpu : *ə(m)pu(複数)	まほし : mān(満ちている)	마하 : manh(多い)		
122 few		すこし : cukk-u(少し)	зис : cök(少し)		
11 one	ひと < *ita : *it'a(-)				
12 two	ふた < *pət'a : *pat' aŋ(-片)		ふた : pčak(-片)		
185 three				みつ : *mit(三)高句麗語	
129 four				よ : *dō(四)アルタイ共通祖語	
124 five				いつ : uci(五)高句麗語	
13 big	おほい < əpu : *ə(m)pu(複数) ふと < pətac : *bət'a[ɪ](大きい)	おほい : upp-u(大きい)			
14 small	ちひ < *tipi : *tipit'(小さい)				
15 long	なが < nāga : *and' aŋ(長い)				
149 mother		あんな : ammā(母)	아마 : ōmi(母)	эмэ : əmə(母)	
16 woman	をんな < *mbina : *binai(女)	め : melli-(女性) へな : peŋ(女性、女性)			
17 man	おとこ < *uya : *uyau(人)	おとこ : pōtt-u(人)	에 : su(人)		
18 person	ひと < pi tō < *Tau : *Tau(人)			ひと : pikte(子)	
19 fish	いし < *ivak : *ivak(魚)				
20 bird		くわ : kur-uvi(小鳥/雀)	とり : tər(鳥)		
21 dog				いぬ : *ina(犬)	
172 snake		はよ : pāmp-u(蛇)	へろ : pūiyam(蛇)	ろ(巴) : *mui-(蛇)	
22 louse		しらぬ : ir(しらぬ)			
23 tree	き kī < *kōi : *kahui(木)				
24 bark		はだ : paŋt-ai(樹皮)			かは : qabəq チュルク
25 leaf	は : *papah(葉)	は : vāy(葉)			
133 grass			くさ : koč(花)		
127 flower	はな : *buqa/baqa(花)	はな : pū(花、花)			
131 fruit	み mui < mbui : *bu'ah(果実)				
27 seed	たね < *tani : *tanam(播えること)				
177 stick		くし : kucc-i(棒、棒)			
28 blood					ち : *tisun モンゴル
29 meat	しし : *it'i(肉)				
32 fat	あぶら : *a ^m pulra(含むこと)				
34 horn	つゆ < *t' uŋu : *t' uŋu(角)				
36 feather	はら < *bulu : *bulu(羽毛) はら *pani < *pali : *palid(羽)	はら : puŋ-utu(羽の羽毛)			
37 hair			け ke : kalki(髪)		け : kil(毛)チュルク
38 head		かしら : kat-ir(頭)			
39 ear	みみ < mbimbi : *bibiy(へり)				
40 eye	め < *mai/ma- : *ma ¹ Ta(目)				
41 nose	はな < *paŋa : *paŋa(突起物)				
42 mouth	くち : qut'u(口)		くち : kul(口)	くち : koč'i(口)高句麗語	
43 tooth	は *pāŋ < *bahāŋ : bayāŋ(臼歯) き < *gi : *gigi(犬歯)	は : pal(歯)			
44 tongue	した < *d' ila : *dilah(舌)				
45 claw	つめ < *d' umpa : *d' u(m)put (爪先で踏むこと)		つま : t'op(爪)		
46 foot		あし : at-i(足)	はぎ : pal(脚)	はぎ : palgan(脚)	
47 knee			ひざ : murŋp(膝)		
48 hand	て < *tai/ta : *taŋan(手)	て : tōl(手)			
49 belly	はら : *palad'(手のひら)	はら : par-a(広がる)	はら : pui < peri(腹)		
51 breast	ち < *tu : *t' ut' u(乳房)		ち : čəč < čəs(乳房)		

第2表 基礎語彙対応語一覧(2)

52 heart				こころ : *kōkūn(乳閉)	: kōkūn(乳閉)モンゴル語		
54 drink	のむ <*inom : *inom(飲む)			こころ : kōr(心)高句麗語	: kōkūz(心)チュルク語		
55 eat	け <*kai : *ka(食う)		け : 'kii(食)		: ʒe me(餌)モンゴル語		
56 bite		かぶる : kavv-u(噛む)	いひ : pap(飯)	いふ : *ʒep(食う)	: ye(食べる)チュルク語		
57 see		みる : mir-i(見る)					
58 hear			きく : kui(耳)				
59 know		しる : ter-i(知る)					
60 sleep	ぬ <*nə : *inəp(ぬる)		ぬ : nup-(寝る)				
61 die	はて <*patai : *patai(死ぬ)	はつ : paʃ-u(死ぬ)					
62 kill		たぶす : tap-u(殺す)		こらす : *gələ-(殺れる)	: gelme(殺れる)モンゴル語		
63 swim			およぐ : əyə(泳ぐ)	およぐ : xəyə(泳れる)			
64 fly		たぶ : tāv-u(飛ぶ)					
65 walk		あるく : al-ukku(歩く)			: alaxa-(歩く)モンゴル語		
66 come					: kil-(来る)チュルク語		
69 stand		たつ : taʃ-i(大きくなる)	たつ : tot(算る)				
71 say		いふ : cepp-u(言う)	いふ : ip(口)				
		のぶ : nūv-al(言う)	のぶ : nil(云う)				
114 dig	うく <*ukə : *ukai : *ukai(掘る)	ほる : pol-i(掘る)	ほる : pe'il(掘る)				
72 sun	しほ : *t' iNay(太陽)	ひ : ve l(明るくなる)					
73 moon		つき : tink-al(月)	つき : tel(月)				
74 star			ほし : pyōl(星)		: *podun(星)モンゴル語		
75 water	ゑ(井) : *vajəy(水)			みづ : muke, mū(水)	みづ : mōren(水)モンゴル語		
	ゑ <*nan : *[dd]anum(水)			みづ : meid(水)高句麗語			
76 river	かは : kalba 'ah(水の多い所)	かは : kav-ar(川)					
164 sea		かは : kaʃ-al(海)	かは : pata(海)	うみ : əpō-mū(大)南島語と(水)アムライ語の合成			
77 stone		から : kal(石)					
78 sand		まご : maŋ(土)					
79 earth	ち : tanaq(土)	ち : ŋal-am(大地)		ち : na(地)			
		ち : nil-am(土)		ち : na(地、土)高句麗語			
80 cloud			くも : kurum(雲)				
81 smoke	あそ(阿蘇) <*ant' u : *at' u(煙)						
82 fire	ひ pi <*apoi : *apu (火)		ひ : pi (火)				
83 ashes	ほひ <*b abi : *abu(灰)						
84 burn	もゆ <*[mə]N poi	もゆ : mūl(火がつく)					
85 road		ち : ter-u(大路)					
86 mountain	たけ <*t' akaj(昇る)	もり : malai(山)	もり : *mori(山)	もり : *mō(木)	もり : modun(木)モンゴル語		
- valley	さほ <saba : *t' abah(窪地)	かひ : *kav-i(狭)		やま : *davan(峠)	: davaga(峠)モンゴル語		
				やち/やつ : dətu(道)			
				たに : tan(谷)高句麗語			
87 red	あか <*akai : *aŋkat(明ける)	あか : ak-al(赤)					
88 green	みどり <*m hind' au ri : *hid' au(緑)	あそ : av-uri(インディゴ)	みどり : pi r(緑)				
89 yellow	きく < : *kuniq						
90 white	しろ <*t' ila : *t' ilak(光)	しろ : te l-i(白くなる)					
91 black	くろ、くら <*golaC : *gəlap(黒/暗)	くら : kar-u(黒)	くら : kam(黒)				
92 night	よひ <*yabi : *yabi(夕/夜)						
94 cold		こる : ku l-i r(冷たい)					
119 far		はるか : par-a(遠く広がる)	はろ : mōl(遠か)				
95 full		みつ : mit-ai(満ちる)	みつ : mit(及ぶ)	みつ : būt-(満ちる)モンゴル語、チュルク語			
96 new			さら : sai(新)				
97 good			よし : dyoh-(善い)				
158 right		ま : mey < *may(真)					
105 bad		わる : var-u(悪事)					
99 dry		いらく : ir-uku(乾く)			*kabuur-(乾く)モンゴル語		
100 name	な <*nag'an : *ŋ ag'an(名)						
100語中	南島祖語 54語	タミル語 54語	朝鮮語 37語	フンクス語 16語	高句麗語 7語	モンゴル語 11語	チュルク語 9語

異的である。確率的に日本語と非常に多くの同源語をもち、系譜からして文法はほぼ同じという言語が文献の中から浮かび上がったのである。この「高句麗語」は、研究者によっては「百濟語」^(注30)であり、また、金芳漢氏はアルタイ系朝鮮語以前の言語として想定する「原始韓半島語」^(注31)そのものであるというが、高句麗時代ないしそれ以前の朝鮮半島で行われていた言語であることは確かであろう。李基文氏自身は、高句麗語を次のように位置付けた。アルタイ祖語から分岐した第4の語派として、扶餘・韓祖語を設定し、これが原始扶餘語と原始韓語に分かれ、前者から高句麗語と日本語が派出し、後者から後に朝鮮語となる新羅語と絶滅に至る百濟語が派生した。^(注32)つまり、日本語は、高句麗語の姉妹、朝鮮語の従姉妹として大陸で生まれ育ち、弥生文化と共に列島に渡来したという考え方である。

5. 古墳時代以降 —まとめにかえて—

「最後に、古墳時代の支配者文化の多くの特色が形成された時期、⑦アルタイ系の言語とともに⑧中国語(漢語)が導入され、日本語の中に混入し、いわゆる上代日本語が形成されるに至った」

現代日本語彙の約半数が漢語という。(欧米語系を別にして) 残りの「やまとことば」自体も、文化と同様、様々な時代に北方、南方から伝わったものが重層的にその語彙を形成していると考えられる。第1・2表で同一語に2系統以上の対応説があるのはむしろ少なく(13・17・25・43・79など)、タミル語と朝鮮語の2系統の対応語が競合しているようにみえる例(1・9・10・122・149・49・69・114・86など)は、逆に日本・朝鮮両語のタミル語起源の証拠にも解釈できる。このように、語学的には極めて説得力があるタミル語説^(注33)であるが、考古学・民族学の支持がない。考古学に都合がよいのは、「高句麗語」説であろうが、上記のとおり、詳細は不明である。通説化した観のあるツングース・オーストロネシア混合語説にしても、上にみたように、決して強固な基盤の上に築かれたものではない。日本語は今後も「世界最大の孤立言語」にとどまらざるを得ないのであろうか。

(こやま・まさと＝当センター調査第1課長資料係長事務取扱)

注1 佐々木高明「日本文化の起源を考える」(佐々木高明・森島啓子編『日本文化の起源—民族学と遺伝学の対話—』講談社) 1993、9～41頁、特に38～40頁

注2 例えば、佐川正敏「アジアのなかの縄文文化」(『文明学原論 江上波夫先生米寿記念論集』山川出版社) 1995、368～371頁

注3 宮岡伯人「旧アジア諸語」(北村甫編『世界の言語』大修館書店) 1981、402～409頁

注4 中川裕「アイヌ語」(柴田武編『世界のことば小事典』大修館書店) 1993、7頁

注5 ①百々幸雄「頭蓋の形態小変異に基づく日本人の起源論」(注2文献所収)、43～53頁

- ②百々幸雄「出土人骨から見た日本人の起源」(『古代史の論点6－日本人の起源と地域性－』小学館)1999、100～102頁
- ③片山一道『ポリネシア人－石器時代の遠洋航海者たち』(同朋舎出版)1991、135頁
- 注6 佐々木高明「東アジアにおける二つのナラ林帯－その文化史的意義を考える－」(『ヒト・モノ・コトバの人類学』慶友社) 1996、323～324頁
- 注7 梅原 猛・藤村久和編『アイヌ学の夜明け』(小学館) 1990、183～184頁
- 注8 服部四郎『日本語の系統』(岩波文庫、岩波書店) 1999、116～147頁
- 注9 松本克己「日本語の系統」『日本人の出現－胎動期の民族と文化』(雄山閣) 1996、150～161頁
- 注10 小泉 保『縄文語の発見』(青土社) 1998
- 注11 崎山 理「日本語の起源」(『古代史の論点6－日本人の起源と地域性－』小学館) 1999、179～196頁)は最近の論考であるが、時期に関して記述が曖昧である。「オーストロネシア語族がニューギニア島から東方のメラネシアに向かう途中、その一派が北上し、琉球・日本列島に影響を与えた」のが「紀元前4000～3000年」で、これを「日本では縄文時代中期以降」(183頁)とする。同じ頁で、縄文時代晩期の凸帯土器を引いて、「最古のオーストロネシア語族が日本列島に達したのは縄文時代後期で、…」と書かれると、この語族の一派が日本列島に来て日本語が生まれたのがいつなのか、さっぱり分からない。逆転の日本史編集部編『日本人のルーツがわかる本』(洋泉社) 1999)147頁で氏は、紀元前3000年の縄文時代中期以降に日本語は誕生したと明言されている。
- 注12 小山修三『縄文探検－民族考古学の試み－』(中公文庫) 1998、309～313頁(この部分の初出は1987年)。川本説については、川本崇雄「日本語と南島語の間の二つの音則」(馬淵和夫編『日本語の起源』武蔵野書院) 1986、169～202頁等を参照。
- 注13 村山七郎『日本語の語源』(弘文堂) 1974)、『日本語系統の探求』(弘文堂) 1978)など。「うお」は『語源』の195～197頁、「ほの」などは『探求』の234～239頁。
- 注14 李基文「日本語比較研究の方法について」(馬淵和夫編『日本語の起源 *Origins of the Japanese Language*』武蔵野書院) 1986、246頁
- 注15 村山七郎、注13文献、106～108頁
- 注16 村山七郎『日本語の起源』(弘文堂) 1973、207～217頁。先住民からすれば、文法的な単語や語尾、そして語順だけが変わったという極めて理解しにくい状況である。Karl H. MENGES, “Japanese and Altaic”(注14文献所収)、pp.144f. 参照。
- 注17 崎山 理、前掲論文(注11)、191～194頁
- 注18 大野 晋「日本語の成立」(『日本語の世界』1、中央公論社) 1980、82～83頁
- 注19 ①大野 晋『日本語はどこからきたのか』(中公文庫、中央公論社) 1999 [初版1991]、158頁
②大野 晋『日本語の起源 新版』(岩波新書、岩波書店) 1994、特に214～244頁
- 注20 現代語については、Kausalya HART, *Tamil for Beginners*, 2 Parts, Revised ed. (Berkley) 1995; Harold F. SCHIFFMAN, *A Reference Grammar of Spoken Tamil*(Cambridge) 1999 など。

- 注21 大野 晋『日本語以前』(岩波新書、岩波書店) 1987、47～51頁
- 注22 注21文献の他、大野 晋『日本語とタミル語』(新潮社) 1981
- 注23 奈良 毅「インド亜大陸の諸言語」(注3文献所収)、238頁
- 注24 ①佐々木高明・森島啓子編『日本文化の起源－民族学と遺伝学の対話－』(講談社) 1993
②諏訪春雄・川村湊編『日本人の出現－胎動期の民族と文化』(雄山閣) 1996
③佐原 真・都出比呂志編『古代史の論点1－環境と食料生産－』(小学館) 1999、等々
- 注25 西田龍雄『東アジア諸言語の研究I 巨大言語群－シナ・チベット語族の展望』(京都大学学術出版会) 2000、24・185・254～255頁
- 注26 ①西田龍雄「チベット・ビルマ語と日本語」(『岩波講座日本語12 日本語の系統と歴史』、岩波書店) 1978、227～300頁
②西田龍雄「日本語の系統」(『図説日本文化の歴史1 先史・原史』 小学館) 1979
- 注27 ①安本美典・本田正久『日本語の誕生』(大修館書店) 1978
②安本美典『日本語の成立』(講談社現代新書) 1978
- 注28 村山七郎『日本語系統の探求』(弘文堂) 1978、114～188頁
- 注29 ①李基文「高句麗の言語とその特徴」(『論集日本文化の起源』5 平凡社) 1973、594～627頁
②李基文『韓国語の形成』(成甲書房) 1983、80～92頁
- 注30 馬淵和夫「日本語の「系統論」もしくは「成立論」のために」(日本語の系統を考える会編『日本語の系統・基本論文集』 和泉書院) 1985、54頁
- 注31 金芳漢『韓国語の系統』(三一書房) 1985、127～140頁
- 注32 注29②文献、93～100頁
- 注33 角田太作『世界の言語と日本語』(くろしお出版) 1992、265～290頁の語順表は、極めて客観的に、タミル語(274頁)が最も日本語に似た言語であることを示している。
- 補注 第1・2表の朝鮮語については、大野 晋『日本語の起源』(岩波新書 岩波書店 1957 176～180頁)、タミル語については付記引用文献、その他の言語については注13・16・28に引用した文献の索引を参照されたい。

付記

脱稿後、大野 晋『日本語の形成』(岩波書店 2000)が刊行された。この大著は大野説の集大成であり、注18～22などは本書を引くべきであるが、第1・2表のいくつかの訂正にとどめた。